



“C. Bechstein Klavierschule” ベヒシュタイン・クラヴィアシュレ

「ベヒシュタイン・クラヴィアシュレ」とは、ベヒシュタインというピアノの個性・設計のコンセプトを活かし、楽曲をより深く理解し演奏する喜びを深める、ピアノの演奏法・上達法を括る概念の総称です。

Schule(ドイツ語)=school という言葉は一般的に学校という意味ですが、流派とか楽派という意味でも使用されています。流派とは、芸術などで、方法・様式・主義などの違いから区別されるそれぞれの系統を言います。(大辞泉)

音楽表現、そしてピアノ製造にもそれぞれ流派というものがあります。

ベヒシュタイン・ピアノの個性を尊重し演奏表現するピアニストに共通する部分は何か、を意識しながらそのパフォーマンスに触れてみると、それぞれに役割を持つ音の縦の分離と個々の横の流れを意識した立体感ある響きの創造、音域による響きの明暗のコントラスト、ハーモニーの進行による緊張感の変化から生まれる音造りに、これら芸術家の意識が向いていることがわかるようになります。

ベヒシュタイン・クラヴィアシュレは、ベヒシュタインの個性が音楽表現の可能性を引き出すことを提唱するものとして、多くの優れた演奏家やレスナーの方々のお力をお借りしながら展開している音楽教育活動です。

この活動を通じて皆様の音楽への情熱がより強く、深くなっていくことを願っています。

株式会社ベヒシュタイン・ジャパン 代表取締役社長 加藤正人

01

ベヒシュタイン・ジャパン ドビュッシー没後100年フィナーレ企画

『ドビュッシー ピアノ曲の秘密』

～ピアノ1台でオーケストラのような効果を出すには～



出演者: 青柳いづみこ(Pf)、加藤正人(対談)

日時: 2019年2月8日(金)

会場: 汐留ベヒシュタイン・サロン



今回は、ドビュッシー没後100周年のフィナーレ企画として、ピアニストで文筆家の青柳いづみこさんをお迎えしてのレクチャーコンサートでした。プログラムはオール・ドビュッシー。

前半は冒頭に(夢)を演奏された後、ピアノ制作マイスターで弊社社長の加藤とベヒシュタインやドビュッシーにまつわる対談が行われました。青柳さんが2018年に発売されたドビュッシーのCDでは、1925年製のベヒシュタインE型が使用されており、その録音に至る経緯を語って下さいました。CDの目玉である《聖セバスチアンの殉教》は、原曲がオーケストラの曲なので、その立体感や神秘的で摩訶不思議な雰囲気を出すのにこのE型がぴったりだったということです。これらについての詳しい内容は、『ドビュッシー ピアノ曲の秘密』(青柳いづみこ監修、音楽之友社2018年11月発売)の対談ページに掲載されています。

ここで、ベヒシュタインと他社のピアノの構造の違いについて、ピアノ製作マイスターの加藤より映像を使っでの説明がありました。時代が変わっても現在まで継承されているベヒシュタインの特徴として、低音域、中音域、高音域と各レジスターの音色の違いを弾き分けることができるということです。戦前のものはよりそれが強く反映されているが、現在のモデルにもその特徴は踏襲されているということです。ベヒシュタインのカatalogなどで「オーケストラのような立体的で多彩な音色作りができる」という謳い文句を目にしますが、その言葉の意味がよく分かりました。さらに際立った特徴として、高音域にいくほど高い倍音が共鳴するようにズレ幅が大きく設計されており、高音でゆらぎが出るように工夫されている、という説明がありました。つまり、それによって生じるうなりが一音一音独特の味わいを生んでいる、ということです。青柳さんがベヒシュタインで特に気に入っているところは、ドビュッシーを弾く際、「ペダルを踏んだままでも音が濁らずクリアに聞こえるところ」だそうです！

後半は、青柳さんの演奏と解説でドビュッシーのいくつかの作品をもとに、各場面でのどのような音が求められているのか、また理想的な音を出すにはどのように弾いたら良いか、またどのようにアプローチしたら良いか、という実践的なレクチャーが展開されました。主に取り上げられた曲は下記の通りです。

- ♪ 〈スケッチブックから〉
- ♪ 《ベルガマスク組曲》より〈月の光〉
- ♪ 《映像第2集》より 第1曲〈葉ずえを渡る鐘の音〉
- ♪ 《聖セバスチアンの殉教》ピアノソロ版(カブレ編曲)より〈百合の園〉、〈法悦の踊り〉
- ♪ 《前奏曲集第1巻》より〈亜麻色の髪の乙女〉、〈沈める寺〉、〈ミストレル〉

ほか

レクチャーの中では青柳さんの演奏法の解釈を裏付けるものとして、ドビュッシー自身が語った言葉がいくつか紹介されました。〈月の光〉の冒頭(譜例1)では、一般的には最上声部を強く出そうとする人が多いけれども、この場合そうではなく、すべての音が溶け合った響きとして聞こえるようにあえて上の音を強調しすぎないほうが良い、ということでした。このことはドビュッシー本人の「名ピアニストの(右手の)小指は不要だ。」という言葉にも裏付けられています。彼は「自分の音楽は全て旋律だ」とも語っており、ドビュッシーの和音は自然倍音列だけから拾われているので、すべての和音がきれいにハモるのです、と青柳さんは仰いました。ある時、ドビュッシーが「君の(作曲の)ものさしは？」と尋ねられると、「耳の喜びです。」と答えたそうです。ドビュッシーは偏屈でとてもこだわりのある人物だったと言われていますが、彼の残した言葉は多くが記録に残されており、そのおかげでこうして現在でもドビュッシーのピアノズムを知る上でたくさんのヒントを得ることができるのは幸いだなと思いました。

譜例1. 《ベルガマスク組曲》より〈月の光〉 冒頭部分



次に、三段譜での各旋律線のレベルの弾き分けについて、《映像第2集》より、第1曲〈葉ずえを渡る鐘の音〉(譜例2)を例に、楔形(三角)アクセントとテヌートの弾き分け方について言及されました。三角(楔形)アクセントは、指を固めて重さはかけずに打鍵のスピードを速く、テヌートはゆっくりと打鍵、また3小節目に登場する最上部の旋律は、輝きを出すために、やはりこれも固い指で重さはかけずに弾きます、とのこと。

譜例2. 《映像第2集》より第1曲〈葉ずえを渡る鐘の音〉



続いて、1889年のパリ万博で展示されたプレイエルのモダンチェンバロに影響を受けたドビュッシーが、自身のピアノ曲にクラヴサン音楽の技法を取り入れた例がいくつか紹介されました。例えば、《前奏曲集第1巻》より〈ミントレル〉(譜例3)では、装飾音はチェンバロのイメージで前に出さず拍頭で合わせ、また両手の激しく交差するところでは指の関節の支えとバネが必要、と弾き方のコツを実演して下さいました。

譜例3. 《前奏曲集第1巻》より〈ミントレル〉



青柳さんが学生の頃のピアノ界は、大きい音でより速く弾くことが競われていた時代で、ドビュッシーなどは指の弱い人が弾くもの、と言う人も多かったそうです。もちろんそれは間違った認識で、ドビュッシーはショパンの弟子であるモーツァルトの弟子でもあり、ショパンのピアノズムを受け継いでおり、むしろ指の強靭さが必要だと仰いました。他にも、ベヒシュタインとも絡めつつ、ドビュッシーのピアノ曲を弾く上でのコツを惜しみなくお話し下さり、フィナーレ企画に相応しい盛りだくさんな内容で、大変有意義な時間でした。

(前田)

イヴァン・ウルヴァロフ

公開レッスン&レクチャーコンサート

～古典派からロマン派への音色と音楽の可能性～



出演者：イヴァン・ウルヴァロフ (Pf.)

日時：2019年3月21日(木・祝)

会場：赤坂ベヒシュタイン・サロン

Iwan Urwalow
レクチャーコンサート
Die Klangfarbe und musikalische Möglichkeit von Klavieren zur Romantische Musik
古典派からロマン派への音色と音楽の可能性

2019年3月21日(木・祝)
3月22日(金)
開演 15:00 (開演)

イヴァン・ウルヴァロフ
ピアノ指導者イヴァン・ウルヴァロフ
指揮者イヴァン・ウルヴァロフ

～ program ～
ハイドン(H1713-1809)
ソナタ第10番 Op.11 No.1, 3, 5
1. Moderato
2. Andante con moto (A-flat major)
3. Finale - Allegro
ベートーヴェン(1770-1827)
ピアノ協奏曲第3番 Op.126
チャイコフスキー(1840-1893)
ピアノ協奏曲第1番 Op.23
グリーグ(1843-1907)
ピアノ協奏曲第2番 Op.16
ショパン(1818-1849)
ソナタ第3番 Op.10 No.3
トリス・ド・ワグネルの協奏曲 Op.65 No.1
ショパン(1818-1849)
ソナタ第3番 Op.10 No.3
ノクターン 第18番 降E大調 Op.9 No.3
ワグネル 協奏曲 Op.56

会場：赤坂ベヒシュタイン・サロン
〒107-0052 東京都港区赤坂5-1-27
TEL. 03-6441-3636
受付時間：14:30～17:00
定額料金：10,000円(税込)

ドイツのカッセルムジークアカデミーで27年間教鞭を取っていらっしゃるロシア人ピアニストのイヴァン・ウルヴァロフ氏をお迎えしてレッスンとレクチャーコンサートを行っていただきました。今回が初来日だということです！ここでは、公開レッスンとレクチャーコンサートの様子をお伝えします。

ショパン：4つのマズルカOp.30の公開レッスンでは、全体として、細やかな感情の機微やキャラクターの違いを楽譜から読み取るような指導をされていたのが印象的でした。例えば、3曲目(譜例①)では、同じフレーズの連続で **f** と **pp**、**ff** と **pp** といった強弱記号が対比的に書かれているところが度々出てきますが、単なる音量の変化ではなく、勇気と不安、のように部分部分でどんな感情かということをはっきり決めると良いでしょう、とのことでした。最後の和音は、誇りを持った **f** で、とのアドバイスを受けて受講生がもう一度その部分を試してみると、実際にただの **f** ではなく誇らしげなたっぷりした **f** に変わり、ご本人もその解釈に納得された様子でした。続く、4曲目(譜例②)は1曲の中で常に変化に富んで、場面ごとに全く違うキャラクターにしましょう、と提案されました。冒頭は cis-moll の半信半疑な様子で始まり、会話のように。左のアルペジオはやや音が厚すぎなので、もっと軽く(leise)しましょう。曲の終わり(譜例③)は句点「。」ではなく、「？」と考えさせるような終わり方で、と実演しながら、ご自身も楽しそうに指導されていました。



譜例①：ショパン：4つのマズルカOp.30より第3曲 Des-dur



譜例②：ショパン：4つのマズルカOp.30より第4曲 冒頭



譜例③：ショパン：4つのマズルカOp.30より第4曲



ここからは、レクチャーコンサートの内容をお伝えします。

プログラム

ハイドン：ピアノソナタHob.XVI / 20,L.33

ベートーヴェン：《6つのバガテル》Op.126

～休憩～

チャイコフスキー：ドゥムカ Op.59

グリーグ：《抒情小曲集》より

〈春に寄す〉op.43-6、〈小人の行進〉op.54-3、

〈トロルドハウゲンの婚礼の日〉op.65-6

ショパン：華麗なるワルツ第1番 op.18

ショパン：ノクターン第8番 op.27-2

ショパン：スケルツォ第2番 op.31



前半は、ハイドンの初期のピアノソナタとベートーヴェンのかなり後期の作品《6つのバガテル》Op.126を演奏されました。ベートーヴェンはピアノの進化とともに曲を作る際にも実験的なことを行っており、今回、ベートーヴェンが書いた通りのペダルの指示記号で演奏してみたいと、冒頭に語られました。氏のとても温かくやわらかな物腰で、演奏にもそのお人柄が表れているようでした。

前半の演奏終了後、弊社社長の加藤よりウルヴァロフ氏への質問がありました。

加藤：非常にスケールが大きく感動しました。聴いていて、色々な音楽的な層があるなと感じたのですが、何か演奏に秘密があるのですか？

ウルヴァロフ氏：まずベートーヴェンが作曲した時にどういうイメージを持って作曲したか、何を考えて作ったかということを考えます。また、この赤坂サロンに設置されているベヒシュタインのモダンピアノも助けてくれました。この楽器では色々なことが可能です。様々な抑揚やダイナミクスをつけることができます。そして、左ペダルと右ペダルの使い分けによって音域感を出すこともできます。もしベートーヴェンがこの楽器を持っていたら、非常に感動し、他の楽器を押し退けてこれを弾いたのではないのでしょうか。

加藤：ベートーヴェン：《6つのバガテル》Op.126では、ペダルについて、今日は当時ベートーヴェンの書いた通りに演奏してみると仰いましたが、なぜそのような選択をしたのですか？

ウルヴァロフ氏：当時と今のピアノでは違うけれども、リハーサルで試してみて、これならいつも色々な実験ができると感じました。

また、後半の演奏を終えて、ベヒシュタインの感想について聞かれると、ウルヴァロフ氏は、「ベヒシュタインは、音域のバランスが非常に取れています。スタインウェイは、力強く、豊かな低音、きらびやかな高音域が出ますが、一方で中音域は非常に工夫しないと目指す音が出てこないで、中音域に関しては難しいです。ベヒシュタインの場合は非常にバランスが取れており、タッチも弾きやすいです。また、音色の選択も可能です」と語られました。ご自身もベヒシュタインピアノを所有されているということでベヒシュタインを熟知しておられ、プログラムも演奏もサロンの小さな空間と楽器の特性が生かされた内容で、大変勉強になりました。

(前田)



株式会社ベヒシュタイン・ジャパン

〒157-0061 東京都世田谷区北烏山9-2-1

TEL:03-3305-1211 FAX:03-3305-9931

E-mail:info@bechstein.co.jp

HP:https://www.bechstein.co.jp/

発行人 加藤正人

編集人 山田啓子 前田裕佳

